後期開幕後２試合連続完封でディフェンス陣。廣井は後期、相手を潰すヘディング、ガッツ溢れるプレーでスタメンの座を勝ち取った(撮影・岩田陽一)

JR東日本カップ　2004　第78回関東大学サッカーリーグ戦（後期）１部リーグ　第9節

KOMAZAWA × TOKYOGAKUGEI

駒澤大学1－0東京学芸大学

前期の課題「接戦」をモノにするも課題は多く…

ボランチ中嶋の奮闘

生温かい気候と風のように、いまひとつ締まらない試合だった。1－0とスコア通りの辛勝。得点も**中後**が自ら得たＰＫによるもの。決定力不足も目立った。しかしそれでも確実に勝ち点３を掴むあたりが駒大サッカーの真髄でもある。

今節・東学大戦の最大のキーマンとなったのは、ボランチに入った**中嶋**だ。この試合、駒大は中盤の両サイドに**関**、**小林竜**という攻撃が得意な選手を置いた。言わずもがな、サイド攻撃の徹底のためである。しかし２人が前にポジションを取ることで、中盤には大きなスペースができてしまう。そこを縦横無尽に幅広くカバーしたのが**中嶋**だった。本来のトップ下ではなく、黒子役に徹した点に関しては「チェイシングと運動量とこぼれ球を頑張ることはどのポジションでも意識しているので」と本人。結果的にこの位置でプレスがかかったことで、守備面では東学大の攻撃の起点潰しに成功し、２戦続けての完封勝利につながった。また攻撃面では、特に前半は、**関**、**小林竜**にボールが多く集まり、サイドからの攻撃が展開された。それだけに後半、**原**、**巻**投入後にロングボールが多用されてしまったのが残念だった。

課題ももちろんある。「前半、後半の入り方が相変わらず悪い」(**中後**)。この日も13分に**中後**がＰＫを得るまでは不安定な立ち上がりだった。しかし、こういう試合をモノにしていくことで、チームはまた一皮向けて成長していく。今節、首位・筑波大が中大に引き分けたため、逆転優勝の道も見えてきた。最後に笑うのは、決して諦めることのない姿勢を見せたチームである。

（遠藤雅之）